

独占と死荷重の発生

供給独占のある市場では、独占企業の利潤最大化により価格と限界費用のあいだに差が生じる。これを「価格の歪み」という。そのため、社会的総余剰が最大化されない。つまり「死荷重」が発生する。

I. 利潤最大化

A. 限界収入と限界費用

1. 限界収入 (MR): 供給量を 1 単位増やしたときの収入の増加分。
(総収入曲線の傾き)
2. 限界費用 (MC): 供給量を 1 単位増やしたときの費用の増加分。
(総費用曲線の傾き)

B. 利潤最大化の条件: 限界収入 = 限界費用 (必要条件)

1. $MR > MC$ のとき: 供給量を増やすと利潤が増える。
2. $MR < MC$ のとき: 供給量を減らすと利潤が増える。

II. 独占企業の利潤最大化

A. 価格と限界収入の関係

1. 供給量と平均収入 (価格) の関係

- a. 需要法則の影響
- b. 供給量を増やせば:
 - (1) 価格を下げなければならない。
 - (2) 平均収入が下がる。

2. 限界収入

- a. 需要の価格弾力性と限界収入
 - (1) 需要の価格弾力性

$$\text{需要の価格弾力性} = \frac{\text{需要量の増加率}}{\text{価格の下落率}}$$

(2) 弾力性の大きさと限界収入の関係

- (a) 需要の弾力性の値が小さいほど
供給量を増やすとき、大幅に価格を下げなければならず
限界収入の値は小さくなる。
- (b) 限界収入が (+) になる場合と (-) になる場合

弾力性	> 1	= 1	< 1
限界収入	+	0	-

b. 平均収入 (価格) と限界収入の関係 $MR < p$

供給量 (q)	1	2	3	4	5	6	7	8
平均収入 (p)	10	9	8	7	6	5	4	3
総収入 (p × q)	10	18	24	28	30	30	28	24
限界収入 (MR)		8	6	4	2	0	-2	-4

注意： 数式による正確な説明については，教科書，242-243 ページを見ること．

B. 価格と限界費用とのあいだの開き

$$MR = MC, \quad MR < p, \quad \rightarrow \quad p > MC$$

III. 完全競争市場との比較

A. 完全競争市場の特徴

1. プライス・テイカー（price-taker）
2. 同じ市場価格で何単位でも売れる．

B. 完全競争市場の利潤最大化条件

$$MR = MC, \quad MR = p, \quad \rightarrow \quad p = MC$$

IV. 供給独占による死荷重（deadweight loss）の発生

A. 消費者余剰と生産者余剰

1. 消費者余剰： 需要曲線が示す価格と市場価格の差の総和
2. 生産者余剰： 限界費用曲線が示す価格と市場価格の差の総和

B. 社会的総余剰最大化の失敗

1. 社会的総余剰（消費者余剰 + 生産者余剰）最大化の条件
 - a. 需要曲線と限界費用曲線の差の総和の最大化
 - b. 需要曲線と限界費用曲線が一致するところまでの生産
2. 供給独占の均衡
 - a. 供給独占均衡の条件 $p > MC$ ： 価格の歪み，price distortion
 - b. このことの意味：

消費者が支払ってもよいと思う価格よりも低い費用で供給量を増やすことができる． \rightarrow 社会的総余剰増大の余地がある．

死荷重： 実現されずに残っている社会的総余剰

参考文献

教科書．第 9 章．

附録： 労働市場の買手独占

A. 利潤最大化条件

1. 労働の限界価値生産力と雇用の限界支出

a. 労働の限界価値生産力： 雇用に 1 単位増やしたときの収入の増加分

b. 雇用の限界支出： 雇用に 1 単位増やしたときの支出の増加分

2. 利潤最大化条件

$$\text{労働の限界価値生産力} = \text{雇用の限界支出}$$

B. 買手独占の均衡

1. 賃金率と雇用の限界支出の差

a. 労働の供給法則の影響

b. 限界支出の大きさ

$$\text{雇用の限界支出} > \text{賃金率}$$

2. 買手独占の均衡での価格の歪み

a. 買手独占近郊の条件

$$\text{労働の限界価値生産力} = \text{雇用の限界支出}, \quad \text{雇用の限界支出} > \text{賃金率}$$

$$\rightarrow \text{労働の限界価値生産力} > \text{賃金率}$$

b. このことの意味：

労働者が望むより高い賃金率で雇用を増やす余地がある。